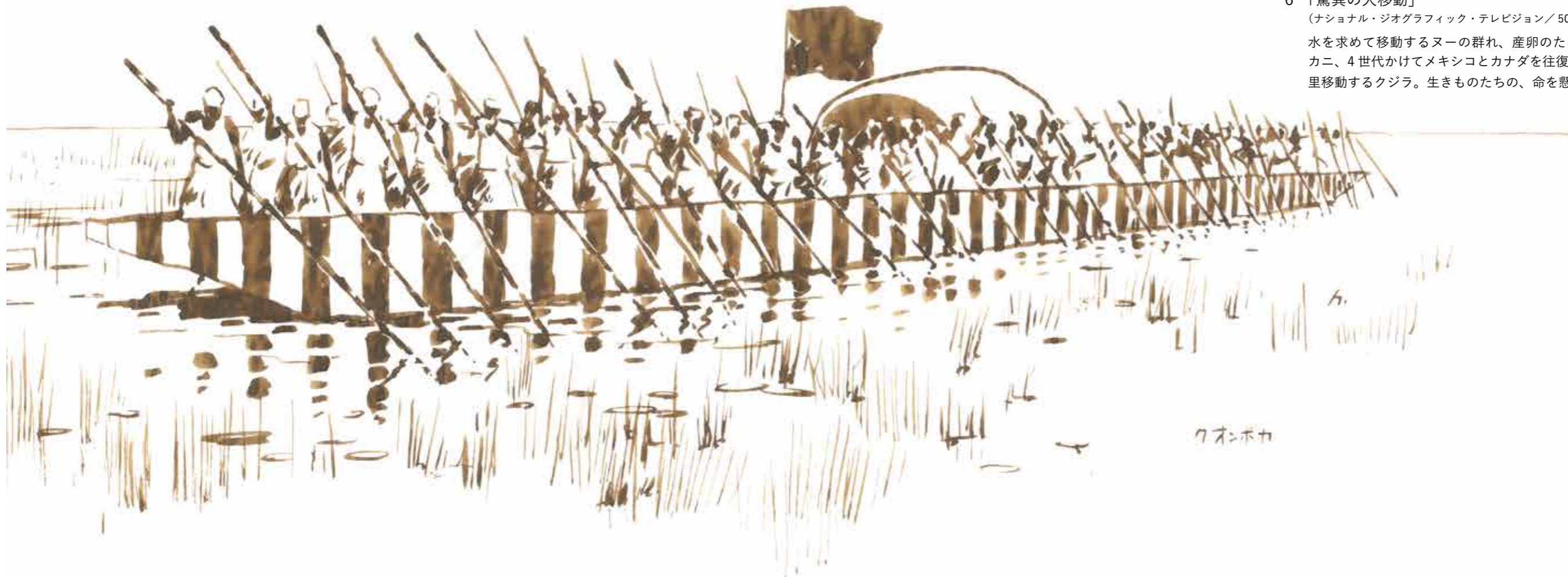


vol.2 「移動の時」 上映作品

- 1 「ブッシュからブッシュへ 遊牧ソマリのキャンプの移動」  
(国立民族学博物館 / 2003年 / 19分)  
ケニアなどで遊牧生活を送るソマリの人びと。ドーム状の家を解体し、家財道具はすべてラクダに載せ、水や草を求めて次のキャンプ地へ向かう。
- 2 「ザンビアのクオンボカ ロジ族の大移動」  
(国立民族学博物館・日本電波ニュース株式会社 / 15分 / 1988年)  
ザンベジ川の氾濫原に住むロジ族は、川が増水してくると、王宮もろとも河畔の丘に移住する。
- 3 「キルギス族の生活」 (国立民族学博物館 / 10分 / 1980年)  
シルクロードをかけめぐった騎馬民族の子孫。パミール高原の北部で、遊牧生活をいとなむ。
- 5 「奥会津の木地師」 (民族文化映像研究所 / 30分 / 1976年)  
山から山へ移動し、椀などの木地物を作る木地師。昭和初期まで福島県南部の山間地で移動性の生活をしてきた木地師の家族による、当時の生活と技術の再現記録。
- 4 「サーミ人のテント」 (国立民族学博物館 / 16分 / 1995年)  
北極圏の先住民族サーミ人。トナカイとともに移動する生活を支えてきた伝統的な住まいを紹介する。
- 6 「驚異の大移動」  
(ナショナル・ジオグラフィック・テレビジョン / 50分 / 2010年)  
水を求めて移動するヌーの群れ、産卵のため森と海とを行き来するカニ、4世代かけてメキシコとカナダを往復する蝶、一生に100万海里移動するクジラ。生きものたちの、命を懸けた地球大移動。

時のドキュメンタリー上映会 VOL.2 「移動の時」によせて

とまきとまき  
座談会



クオンボカ

# ときどき座とときどき会

S木：デザイナー。理想の移動手段は口バ。

M子：デザイナー。理想の移動手段は気球。

Y美：生活工房企画担当。理想の移動手段はセントバーナード。

〈ゆれ動く自然、動かない私たち〉

Y美 さーて、今回の上映テーマは、「移動の時」ですね。

世界のさまざまな民族や生き物が移動する、その「時」を見ていくわけですが。

S木 どうして今回、「移動」かといいますと…。もともと僕らの生活は、天体の動き、自然の律動に依じてゆらいできたはずですが。でも現代の都市生活は、その自然のゆらぎの影響を減らそう減らそうと発展してきたところがあって、年中快適な室温の中に暮らせるし、川も氾濫しなくなりました。けれど地球のほかの場所では、昔から、今も、寒暖の変化に応じて高地から低地へと移動したり、川の氾濫に合わせて引越しをしたり、そういう人々がいる

んですよ。自然とともにある、ゆらぐ生活とはどんなものなのか、この上映会を通して想いを馳せてみたいと思います。

M子 「時をときはなつ」では、さまざまな時とかかわる「時のフィールドワークショップ」と並行して、この「時のドキュメンタリー上映会」を行っていかかかわることはできないほど遠くても、違う世界のどこかではリアルに起きていることを、記録映像を通して想う企画。去年の年末には、「一年」というタイトルで、一月一日以外のさまざまな時期にやってくる世界の「新年」を見ていきました。今回「移動」にしたのは、この時期引越しをする人が多いからというものもあったんですよ。

Y美 三月末っていうと、転動とか学校が変わるとかで住まいを移す人が多くて、それは日本が年度の変わり目だからなんですけど。でも同じ日本でも昭和初期までは、「奥会津の木地師」で見ていくような、何十年も山を渡り歩く移動生活を送る人々がいたり。

S木 マタギの人たちもそうですが、狩猟採集の人々は、基本的に移動生活のイメージがありますね。でも、たとえば三内丸山遺跡は、縄文時代に狩猟採集を主体にしながら定住していたとか。最近の本を読んでいると、旧来の、狩猟採集⇨移動、農耕栽培⇨定住、という図式も変わってきているような印象もありますね。三内丸山もそうなのかな。

Y美 動かなくても狩猟中心で食料が手に入る豊かな環境なのかな。ズムなのかな。

Y美 『ブッシュからブッシュへ』のソマリの人たちが、基本は草や水を求めてですが、女性たちがラクダのミルクを売りやすい土地に行きたい、という要望も強かったような。

M子 気分的なものも大きいのかも。日本は四季があるから同じところにおいても景色が変わるし、モノが



奥会津 木地師の家

境だったということですね。でも三内丸山あたり、かなりの豪雪地帯ですよ。日本ほど大人数が豪雪地帯に住んでいる国もないようで。豪雪で冬が

越せないぐらい物理的に辛ければ、冬の間だけ南に動くというのもアリだったはずなんです。『キルギス族の生活』では夏は涼しい山で過ごし、冬は山を下りていましたよね。縄文時代にすでにこの豪雪を乗り切れる知恵とか工夫を見つけたから、移動しなくて済んだ。合掌造りの曲梁とか、日本家屋のしなやかに雪の重みを逃がす工夫はやはりすごいですよね。

S木 三内丸山では、三〇メートルくらいある大型の堅

多いから模様替えなんかもできるけれど、ソマリみたいに本当にシンプルな暮らしをしていたら、ちよつと違う景色が見たくなるかもしれない。

S木 動物も、自然・環境の律動に合わせて動くものもあるけれど、『驚異の大移動』の中のクジラみたいに、そもそも動くことそのものが生きることのような動物もいますね。

Y美 オオカバマダラの移動距離もすごいですよ。やはり食料を求めてでしたっけ？ それとも気温的なもの？

M子 自分が吸う花の蜜を求めてというよりは、幼虫の食草であるトウワタという植物を求めて、という感じ。八〇〇キロ移動してきて、トウワタに卵を産み付けて、卵が孵る頃にはトウワタが食べ頃になっていて。その幼虫が成虫になると、また八〇〇キロ移動する。4世代かけてメキシコからカナダまでの大移動はとても不思議です。

Y美 ずつとメキシコにいたのでは、トウワタがなくなっちゃうんですかね。桜前線ならぬトウワタ前線を北上する。

S木 自分の世代でなくなってしまうというよりも、次の世代のために残しておいているのかも知れませんが。自分が食べたならその場所を移動し、子どもたちが生まれる場所ではまだたくさん食べものがある。

M子 幼虫がトウワタしか食べられないんですよ。食べられるものが限られているので移動せざるを得

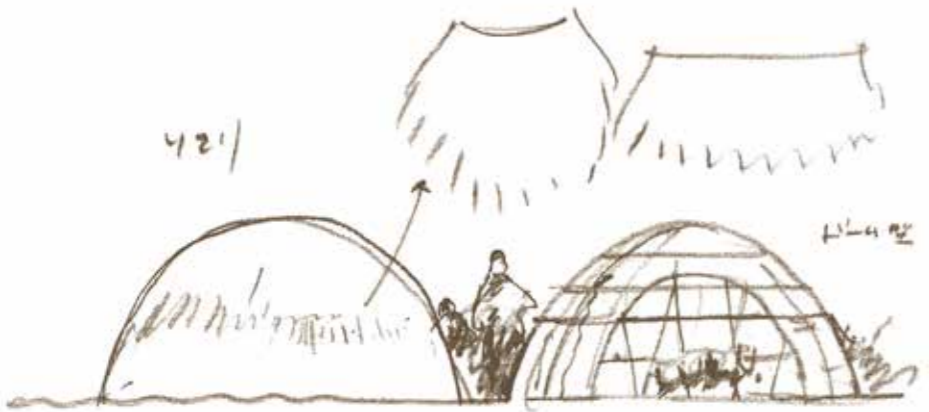
穴住居があったとか…。復元した建物の写真を見ると、とても頑強に見えますね。時代は違いますが、ノルウェーで観たバイキングの人々の集合住居も、大屋根が大地に伏せているようで、三内丸山と印象が似ていました。そこは北極圏でしたよ。強くて大きな家。

M子 大雪の地域では、『ブッシュからブッシュへ』遊牧ソマリソマリの生活』の家のようにラクダの背中に満載して…というわけにはいかないですね(笑)。軽々動ける、移動を前提とした家と、あらゆることに耐えられる強固な定住の家。今回の映像でも、いろんな家が出て来ますね。

S木 住まいの違いに注目してみてもおもしろいですよね。アフリカやモンゴルは平坦な土地だから、仮設構造物が移動しやすいということがある気がします。サミーの地域もそうかな。

Y美 民族文化映像研究所の『越後奥三面 山に生かされた日々』というドキュメンタリーがあるんですが、この新潟の映像を見たサミーの人があまりの雪のすごさにどよめいたっていうんですね。北極圏の人に雪で驚かれるという…。『サミー人のテント』に少し出てくるように、サミーはトナカイとともに移動する人たちですが、トナカイはトナカイゴケを求めて移動しますよね。

S木 そうですね。草地を求めて移動するパターンっていうのは、季節が動いているというよりも、ある程度時間が経ったら移動するっていうタイプのり





なくなる。わりとなんでも食べられるならずつと  
その場所にいられるのかも。

**Y美** さっきの三内丸山の話、調理の技術が向上したた  
めに、食べられるものが増えて、移動しなくてよ  
くなったということもありますね。トチの実とか、  
そのままでは絶対食べられないのに、縄文時代に  
すでにアク抜きの方法を思いついているんですよ  
ね。

〈時間を置いて、戻ってくる場所〉

**M子** もののけ姫に出てくるような、タタラ製鉄の人た  
ちも移動していたんじゃないですか。

**S木** 製鉄は砂鉄だけでなく大量の炭木も必要だか  
ら、まわりの木がなくなってきたら移動して、数  
十年後にまた戻ってくる、というサイクルがあつ  
たのかも知れないね。たしか、あの山をわたる巨人  
ダイダラボッチは製鉄民族に関係があるとか…。

**Y美** なるほど。そうすると、個人や種の好き嫌いと  
う話ではなくてきますよね。個人消費を越え  
た欲望が集まって、経済社会が取り尽くしとい  
う行為を生んでいるというか。

**S木** でもタタラや「奥会津の木地師」のように、森な  
ら、ぐるぐる回っているうちにまた木は生えてく  
る…。

**Y美** 焼畑もそうですよね。動きながら、回復を待つ。

**S木** 野原でお弁当を食べているときに、ずっとここに

時間的多様性のような視点は、一つしかない地球  
に生きるためのアイデアとしてもっと考えても  
いいのかも。木だけじゃなくて。セーのでみんな  
がいつべんに使ってしまったら枯渇してしまうと  
いう状況を、時間的な観点でちょっとずつずらし  
ていけば、まだまだ見えていない恵みというか、  
資源に気づけるのかもしれない。

**Y美** 時間で分配するということですね。別荘でもその  
うのありますよね。いろんな国の人一〇人で一  
つの別荘を所有して、数週間ずつ利用してまわし  
ていく。それぞれバカンスの時期が違うから、日  
本人だったら夏に利用する。

**S木** タイムシェアリングですね。

**Y美** サーミとかイスイットたちは、「このあたり一帯  
が自分たちのエリア」という気持ちはあるかもし  
れないけれど、個人個人、家族ごとの土地とい  
うのはないですよ。私たちは好きな場所に移動  
したいと思っても、どこもかしこも権利があつて、  
勝手にテント立てられないし、雑草摘むにも許可  
がいる(笑)。

**S木** 今の世の中のシステムは、定住を基本に考えられ  
ていますもんね。日本は特に…。

**Y美** 木地師も、どんな山でも行き来していい免状を  
持っていたのに、山の所有権の問題で、今までの  
ような生活ができなくなった。

**S木** 里の人たちも、山の下のほうしか使わないから上  
のほうはいいよ、という気でいたんだけれども、



明治に入って「誰々の土地」ということになって  
しまったから。土地は本来、もっと立体的なもの  
だったんじゃないかな。

**Y美** ここから上は神様のもの、という領域もありまし  
たよね。もう今、神様の場所なんてないかも…

**S木** そう思うと、「誰のものでもない場所」って必要で  
すよね。ほくは子どもころ南極が何処の国でも  
ないんだって知ったとき、なんとなくほっとした  
なあ。

**Y美** 今回見てきたような「移動の時」の概念でいえば、  
「誰のものでもない場所」というのをずっとじゃな  
くても、ある一定期間設けたほうが、大地が生き  
返るような気がしますね。『ザンビアのクオンボ  
カ』も、川の氾濫がおさまって元の地に戻ると、  
肥えた大地が待っているんですよ。

座っていたら下の草がかわいそうだな、と思い始  
めるときがあつて。ちょっと経ったらちょっと動  
くか、とか(笑)

**Y美** 等しく踏むんですね(笑)

**S木** ずっと居続けるとそこだけお日様の力が働かなく  
なってしまう。たまに動くと、そこに、いろんな  
地球の律動が働きかけられる余地ができるとい  
うか。地球規模でも同じですよ。今回残念ながら  
上映作品からは外れてしまったけれど、国立民族  
学博物館の『フルベ族の生活』という映像の中  
では、カメルーンなどで遊牧生活を送っているフル  
ベの地で、フランスの植民地時代に定住政策で深  
井戸が作られて、確かに水を求めて移動するのは  
大変だったから便利になったんだけど、牛が牧  
草をその周りだけ食べ尽くしてしまったり、集団  
同士の小競り合いが起きやすいからその場に居ら  
れなくなったり。結局、井戸は定住ではなく立ち  
寄るための場所になっていくという…。

**Y美** 移動が人間の本能なのか宿命なのかそ  
でないのかわからないけれど、定  
住と資源の枯渇という問題は切  
り離せないのかもしれないで  
すね。

**S木** 定住と資源の枯渇か…。でも  
たとえば、一年ごとに一〇分の  
一ずつ木を伐つていけば、いろ  
んな状況の森ができますよね。



〈自分が帰属しているものの、向こうがわ〉

**S木** 現代では、自分の夢を追って移動する人もいます  
よね。大きな街でやりたいことがあるとか、山村  
で農業や林業をやりたいとか。今、土地への帰属  
意識が希薄になって、自分で自分の生きる場所を  
選べる時代になった。時間の問題に対して風穴を  
開けるために、自然の律動に合わせて移動する  
ということもアイデアの一つだと思う一方で、土  
地との関係性とか共同体とのコミットメントが希  
薄化しているという、現代社会の抱える問題があ  
りますよね。そこについてはどう考えたらいいか。  
**M子** 使い捨てみたいに、汚し放題で次々と移動して  
くのは嫌だなと思った。

**S木** 映像で移動していく人たちはみんな、発つ跡をす  
ごくきれいにしていたね。

**M子** それはやっぱり移動していても、帰属意識がある  
んじゃないかな。また帰ってくるかもしれないっ  
ていう。

**Y美** 全く知らない土地までずっと終わりなく移動す  
るっていうのは、それはもう、旅のような、漂流  
のような。この人たちの移動は、いつか戻ってくる、  
振動の時間というべきものかな。

**S木** 大地全体に帰属している感覚もあるのかな。もう  
見渡す限り向こうまでとか、遠くの遠くにみえる  
あの山まで自分たちに関係している、というよう  
な、おおきな帰属意識なのかも。

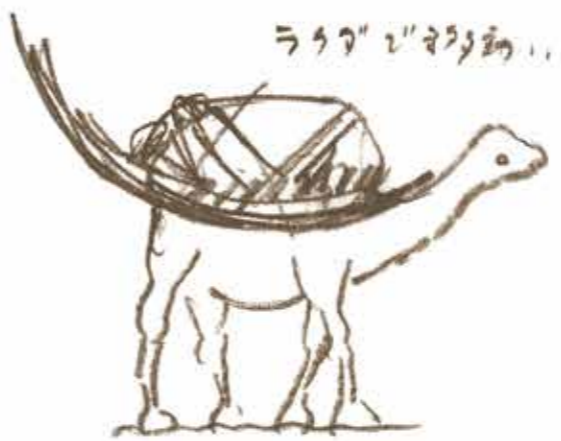
**Y美** もしラクダの餌となる植物がひと月くらいで元通

りになるなら、前いた土地は「ひと月後には戻る場所」ですよ。でも木地師さんみたいに三〇年は放っておかないと林が再生しないなら、帰ってくるのは三〇年後。そういう長い時間も、木地師さんとその家族のなかでは「時間差の森」みたいになってマッピングされているんでしょうね。

**S木** さらにそれを世代を超えて継いできたんですね。人間と土地が時間でしっかり結びついているというか。

**Y美** 今はまず、住んでいる場所が生業と結びついていないですよ。祭りももとはその地域の農耕なり狩猟なりがうまくいくように予祝する意味合いが大きいけれど、いま全国的に祭りが均質化・形骸化してきている。

**S木** この間お会いした農家さんも、昔は地域で同じも



もつと動けるんだったら移動時間は遅くてもいいのかも。リニアなんか、外の景色も見られないらしい。

**M子** 満員電車もひどい移動ですよ！ 船とか馬での移動なら楽しいけど。

**S木** 生きるために移動する、というかつてのような状況は今ではなくて、むしろ移動中は非生産的で自分の人生は生きていないというか、進んでいないかというか、そういう感覚があったりするのかな。電車なんかは、近い、早い、が好まれる状況を見ていると、そういう感じがありますね。

**M子** うんうん。でも、リラックスしてほーっとできる環境ならいいけれど、今の移動の状態は、ストレスを感じる状況が多いから。

**S木** うーん。かつて、国内旅行が流行ったときなんかはまだ、移動そのものに意味を見いだしていたように気がしますね…。

**Y美** 飛行機に乗る時にみんなで旗振って見送るみたいなね。

**S木** 移動が速くなった究極のものは、ドラえものの「どこでもドア」だよ。あれを見たとき、子ども心に、なにか不思議な気持ちがあった。例えば北海道に行きたいと思って、ドアを開ければもう北海道って、何かそこに決定的なものがなくなった気がしたんだよね。北海道まで行くには、北斗星っていう電車があって、夜行列車で行くと…、とか考えたり、そういうことが…。

のを作ってみんなでお祭りをやっていただけ、今はそれぞれいろんなものを作っていて収穫の時期が合わないから忙しさもばらばらで、お祭りがなくなってきたというようなことを仰ってました。同じ時間を共同体で共有するということが少なくなってきたままです。

**M子** 家の近所、昔は植木屋さんが多かったですけど、今も結構残っているんですけど、同じ地域で同じものを作っていたほうがお互い助け合えるのかな。肥料を分け合ったり、害虫の情報を共有したりとか。

**S木** 今は土地への帰属というより、モノ単位・コト単位への帰属のほうが強くなったのかな。全体的な帰属じゃなくて、部分的にいろいろなものに帰属している気がする。帰属が細分化しているというか…。

**Y美** 働きながらNPOもやって、子どものPTAもやってとか。今までだったら村の中だけの役割分担だったのが。

**S木** それぞれ帰属しているもの向こうがわを意識するといいかもしれないですね。ずっと辿っていけば、自分が一体何とつながっているのか、それはどんな律動とともにあるものなのが見えてくるのかも知れない。

**Y美** 帰属は確かに一つではないのかもしれないですね。ソマリにしても、一頭だけぐれラクダみたいなのがいるとして、うちの家族はこのラクダと

**Y美** 大阪・北海道間を二十二時間で結んでいたトワイライトエクスプレス運行終了のニュース、見出しが「豊かな時間をありがと」でした。

**M子** やっぱり虚しくなりますよね、結果だけになるから。遠足に行くために前日から準備しているのに、「どこでもドア」で山の頂上にはっと行って、お弁当だけ食べてまたばっと帰ってくるなんて。結果ばかりが人生を占めていたら、おかしくなっちゃう。山登りも決して頂上が楽しみで行くわけじゃないですよね。

**S木** 結果ばかりを求めると、やはり道路はスムーズにモノが動けるように平らでまっすぐに作られ、その先にワンストップで何でも手に入る施設があり…と、どうしても街は均質化していつてしましますね。どつちが先かわからないけれど、即時化・高速化・均質化する時に合わせて、街は作り変えられていってる気がする。そう考えると、時を变えることができる気がします。人工的環境を完全に自然に戻して、そのゆらぎに身を任せようっていうのではなくて、自然にゆらぐ時間のことを考えながら、身のまわりの環境のことを考えてみる。

**Y美** 街を変えていくなら、さっき話が出たような、なぜそこに植木屋さんが多いのか考えるのが第一歩な気がする。その場所がもともとどんな土地だったのか、土や水や日当たり、植生などの面で、植木屋をやるのに適した環境があったのではないかと

一緒に動くから、あなたたちとお別れよ、とはならないわけですよ。ラクダに帰属しつつ、集団にも帰属している。

**S木** 家族のつながりもあるし。もしかしたら携帯を持っていて、その向こうの人たちに帰属しているかもしれない。

**Y美** 今やマサイの人たちも携帯で株やってるらしいですよ。

**S木** じゃあマサイでありながらニューヨークにも帰属してることもある…。

**Y美** 他の人は寝てる時間なのに、株やってるマサイの人はニューヨークの市場が開く時間に起きてたりとかしそうですね(笑)。

#### 〈豊かな時間／空間とは〉

**S木** 移動の意味は昔とずいぶん変わってきていますよね。インターネットや物流網の発達で、ある種の伝達とか輸送は自分が動かなくてもよくなった。じゃあ何のために今は私たちは移動するんだろう。人に会うため？ 何か伝えたいとか渡したいとか、急がなきゃいけないことは別の手段に任せておけるわりに、なぜ僕たちは、自分の移動のスピードを重視したりするんだろう。

**Y美** 移動しているように見えて、飛行機とか電車とか、むしろ私たちは席に固定されていますよね。それが苦痛というのもあるんじゃないですか。自由に

とか。街がすべて均質化してしまってきたというけれど、その場所本来の姿を知る手掛かりはどこかにはあるはず。もともと栗がたくさん採れた場所だから栗の木をまたたくさん植えよう、というのとは違うことかもしれないけれど、その土地の記憶、時の重みを知るところから。

**S木** そうですね。移動と時のことを考えてゆくと、土や場所のことに行き着くところがありますね。まずは、今自分が居る場所のことをよく知る…。土地のかたちを意識してみたり、地名の由来とか、どんな苗字の人が多くとか、そういうのを愉しみながら知っていつて…。みんながそれぞれの土地でそんなことを考え始めたら、なんでもかんでも同じスピードでどんどん動いていつてしまうということは減ってくるのかも知れません。

(二〇一五年三月五日 生活工房にて)

